

日中戦争日記

村田和志郎

第七卷 警備戦下

重慶を臨時首都と

口長沙に各部分散

南京政府

捕虜二千に上る

神速皇軍に茫然

杭州

北平

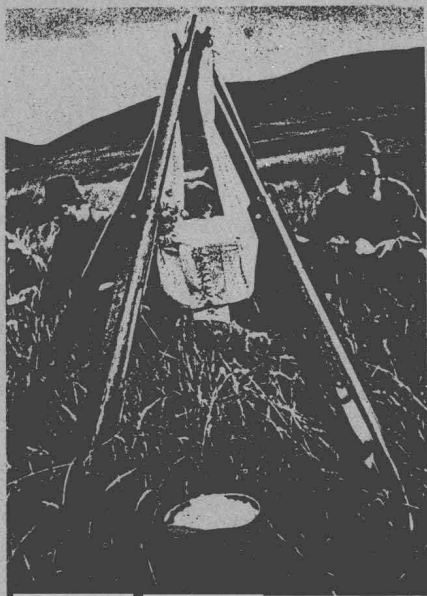
長月抗

鵬和出版

日中戦争日記

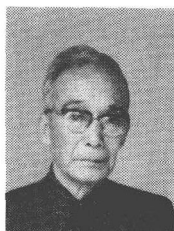
第七卷 警備戦 下

村田和志郎



鵬和出版

著者略歴



村田和志郎（むらた・わしろう）

明治三十六年十月 福岡県嘉穂郡碓井村生まれ
 大正十二年三月 福岡県立嘉穂中学校卒業
 昭和三年三月 明治大学法学部独法科卒業
 昭和五年三月 陸軍幹部候補生
 昭和五年十一月 陸軍歩兵伍長（予備役編入）
 昭和十二年九月 召集、歩兵第百二十四聯隊所属
 昭和十三年六月 陸軍歩兵軍曹
 昭和十五年四月 召集解除
 昭和十九年二月 臨時召集（将第一四六一部隊、
 造第一一四〇部隊、隼第一六六
 六七部隊等に所属）
 陸軍曹長
 昭和二十年三月 現地召集解除
 昭和二十年八月

日中戦争日記 第七巻	昭和六十一年八月十日 初版発行 定価千五百円	著者 村田和志郎 編者 宇都宮泰長	発行者 竹内 洋	発行所 鵬和出版 東京都目黒区八雲五一十一-101号 電話（〇三）七一一四二三六代 振替口座 東京 八一四九六一九番	印刷・製本 仁科印刷有限会社
-----------------------	---------------------------------------	------------------------------	-----------------	---	-----------------------

（落し本・乱し本はおとりかえいたしません）

目次

昭和十五年

一月一日	新年演芸大会	11
一月二日	綏靖軍全滅	12
一月十七日	聖旨伝達式	45
一月二十三日	サインと兵隊	55
一月二十七日	新設マラリヤ病院へ転院	61
一月二十九日	宋公館を見物	66
二月二日	悲壮な話	72
二月三日	乱酔将校	73
二月十日	皇軍苦戦の噂	91
二月十五日	秩父宮殿下、来広	102
二月十七日	賭博開帳	104

二月二十八日	殺害された中国人の幽霊	117
二月二十九日	数奇な運命の日本人	119
三月四日	退院	125
三月十九日	師団長来湖	144
三月二十七日	敵機来襲	153
三月二十八日	幽霊の話	156
四月四日	西湖出発（帰国の途につく）	174
四月七日	乗船	175
四月十日	基隆入港	181
四月十四日	関門海峡通過	193
四月十五日	似島碇泊（陸軍臨時似島検疫所）	195
四月十六日	門司上陸	197
四月二十三日	除隊帰郷	204
	あとがき	229

装丁・構成 宇都宮泰長

◇第一卷 目次（内容）

昭和十二年

九月 召集

入営

十月 門司乗船・出港

富江港入港

富江島見聞記

富江港出港・佐世保入港

佐世保出港

十一月 杭州湾上陸

楓涇鎮附近の戦闘

楓涇鎮における戦闘詳報

嘉善附近の戦闘

嘉興附近の戦闘

嘉興入城

八里店における捕虜虐殺

十一月 湖州地区警備

朝鮮人慰安婦

十二月 湖州出發

漂陽より反転、宜興・長興へ

富陽附近の戦闘

昭和十三年

一月 杭州入城

師団主催慰靈祭

賀陽宮入来

慰安婦配当

慰安所開業

◇第二卷 目次

昭和十三年

二月 湖州に再入城

討伐戦闘日誌

掃蕩戦闘概要

湖州帰営

三月 生首随想

遺骨搜索

四月 小堺部隊長離隊

五月 李家巷の戦闘

呂山、紅溪鎮確保

兵員損耗状況

六月 日本ビル開店

不祥事件発生

七月 湖州出発

杭州再入城

杭州出発、上海へ

抗日秘密テロ団

八月 竺家橋籠城

討伐出動

江湾兵舎へ移動

九月 大上陸演習

軍情報

遺骨箱準備

輸送船大破

上海碼頭へ

◇第三卷 目次

昭和十三年

十月 乗船

吳淞沖へ出航

バイヤス湾上陸

伝単「親愛証」

広東入城

伝単「日本農民大衆ニ告グ」

広東市内掃蕩

広東郊外出発、燕唐へ

熱発

十一月 蚊帳徴発

三名行方不明

シャーリ・テンブル写真入手

捕虜九名の顚末記

討伐行

捕虜銃殺

十二月 新塘宿営

旅団長来塘

聖旨伝達

朱村移転

献納毛布

大晦日

昭和十四年

一月 拝賀式

一月 参謀巡視

工兵隊陣地構築

良民証発給

◇第四卷 目次

昭和十四年

二月 工兵隊広東へ引き上げ

朱村、嫁入り見物

郷土出身慰問団来訪

討伐準備

討伐出動

木下部隊長病死

宣撫工作

南支皇軍慰問団

三月 増城へ移駐

墜落海軍機

三月 抗日文書

ビー移転

四月 初年兵の戦死

敵襲

広東人の観察

緊急出動

捕虜（少年兵）

中国女性の惨殺死体

五月 日本軍捕虜秘話

捕虜斬殺

友軍相撃ち

掃蕩戦

逃亡兵

こんな兵隊

日本人慰安婦

忠勇美談集

◇第五卷 目次

昭和十四年

六月 田部大尉以下六柱、遺骨出発

宣撫班出動

うなされた者

偵察行

夢

高官毒殺（師団会報）

代議士の戦場視察

捕虜追放

七月 緊急出動

増城より蛇頭嶺へ移駐

朱村再訪

掃蕩出動

アマーバ赤痢により隔離

將校拉致される

八月 再度発熱

補充兵配属

敵機飛来

捕虜の告白

慰安所新設

敵、毒ガス使用

高射砲隊、奇襲される

友軍機誤射

竹槍部隊

掃蕩出動

九月 友軍誤射（白水和一等兵戦死）

石井部隊の噂

警備出動、人質救出

増城慰安所

十月 ガス煙教育

捕虜虐待

第百十四聯隊到着

移駐開始

麦地（中山大学工学院）到着

ガス煙教育

十一月 映画館の抗日壁書

宣撫出動

朝鮮人慰安婦

十二月 警備出動、家屋打ち壊し

出動準備

食料徴発隊

◇第六卷 目次

昭和十四年

九月 朱村再訪

反日壁書

十二月 マラリヤで入院

支那人の徴用

病院警備隊

越年準備

二月 秩父宮殿下、来広

賭博開帳

殺害された中国人の幽霊

数奇な運命の日本人

三月 退院

師団長来湖

敵機来襲

幽霊の話

◇第七卷 目次

昭和十五年

一月 新年演芸大会

綏靖軍全滅

聖旨伝達式

サインと兵隊

新設マラリヤ病院へ転院

宋公館を見物

二月 悲壮な話

乱酔将校

皇軍苦戦の噂

四月 西湖出発（帰国の途につく）

乗船

基隆入港

関門海峡通過

似島碇泊（陸軍臨時似島検疫所）

門司上陸

除隊帰郷

日中戦争日記 第七卷

凡例

一、本書（第七巻）は、便箋百三枚（一枚平均三十四行、一行四十二字）に記された昭和十五年一月一日より同年四月三十日までの日記の全文である。

一、内容については、あまりにも個人的な公表をばかられる箇所は削除した。

一、仮名づかいについては現代仮名づかいに改めたが、文脈から原文のままにしたところもある。

一、誤字脱字、誤記の明らかなものは訂正し、漢字についても現代風に改めた部分がある。（ ）内は戦後、説明として追加したものがある。

一、時刻については表記を漢字（午後五時とか一七〇〇など）にした。ただし、引用文についてはそのまま記した部分がある。

一、部隊記号、部隊符号については文字で表記することに統一した。

一、本書の校正・校閲については、編者・宇都宮泰長の責任において厳正に実施した。

昭和十五年

一月元旦 晴

お雑煮が出来た。八尋、末松英夫、梶原辰巳の三君が朝早くから作ってくれた。裏に煉瓦を積んで、飯盒を三つも掛けて焚いてくれた。八時半、五人でおいしく戴いた。経節の出しがよく出来ている。なかなかおいしい。スルメ、いりこも入れてある。五人でしんみりとしたお正月だ。

昼に刺身。夕食に焼鯛、バナナ、蜜柑もわたる。軍医中佐、軍医学校の巡視。三時半、二時間、演芸大会。

一月二日 晴

外出（引率）沢本軍医少尉。古賀君来。入浴。別のビール招宴（軍医）。

一月三日 晴

大和市附近、綏靖軍全滅。正月元旦の出来事、七十名戦死、中二名は日本軍人。第十八師団、広東帰還。近日急遽、南寧に赴くべし、と今朝の（会報）に出たというニュース。うろたえる者あり。

満期なるべしと台湾に編成替え、青島行きと。

一月四日 晴

勅語奉読式。稿を草す。南支日報は北上軍反転帰還を報ず。

一月五日 曇

シャツを洗う。碁、将棋をさかんに病室のあっちこっちで始めている。近頃は書く事もない。まるきり寝るだけである。本も手許にあつてると、さして読めるものではない。読みこたえのある本が手近にないせいでもある。『ドイツ戦没学生の手紙』なども通り一遍のもので、さして興味を誘わない。火野葦平の作など、全く世界的に喧伝されるのも無理はない。まあありふれたものが多い。

渋谷金三衛生上等兵は、友人の笹尾鶴雄軍曹を知っていた。養子に行つて田中に変わつていふと言ふ事だ。増城には七月頃からいたと言ふ。また福田英一一等兵も知つていた。下士志願をしたという事である。渋谷君は風味のある人柄のようである。おとなしく真実のある人間、それでいて歌も歌い酒も飲み暮もやるといふ。男らしい男である。顔付きが恐ろしい所があるけれど、至つていい人間である。落ちついてゐる、頼りになる人間はこうした人間である。

間食をしなくなつたので、腹の調子がよくなつて来た。東京相模の山下勇太郎君には、二人分の食事をとつてやる事にした。平熱患者は胃散だけ飲んでゐる。

七時半の起床はまだ暗い。

大阪部隊の某君は現地満期、二百五十円、手当五十円位できめたと言ふ。浅野セメント広東出張所、バスの中で知り合つてとりきめたと言ふ。幸運か不運かはわからないけれど、縁は人の一生を支配する。第一線部隊には断じてそうしたチャンスは与えられない。市内警備の安楽な部隊に、そうした幸運が降つて来る。運命の皮肉とはこれであらう。(二〇四〇)

将校が一人入つて来た。第百十四聯隊の将校という声に自分は出て会ふ。「我が師団

は作戦変更に伴い帰還の途中、浜本兵团との間に敵を挟み撃ちしたようですね。何かありませんか」と言うと、「実は私は心掛けていたのですが、何の通報もありませんでしたが昨夜一晩中列車が動きました。もう黄浦江乗船場へ向かったのではありますまいか」と言う事である。私の方では追及命令あり次第、追及しようと退院になりそうな患者等用意を命じています。とこんな話であった。

南支日報は中島部隊の奮戦を報じている。又一人の兵隊の話では、今日百名ばかりの負傷者が入院するとの事ですと話した。もう乗船したのかも知れない。物品監視隊とはおそくとも行動を共にしなければならない。取り残されるのはいい気持ちはしない。たとえそれが一等戦病であるとしても。

胃がいれんで苦しむ者、熱を出す者、色々ある。はっとしてみると、岩見伍長が前に立っている。見舞いに来てくれたのである。追及の準備をしている事など話すのであった。七日、八日、黄浦江に集結、中山大学には来ない。黄浦から連絡に来るでしょう。そんな事も話した。佐々木上等兵からもよろしくと言伝があったと。外出が出来んからの事であった。葉山と飯田の行方が皆目わからない。捜すように頼んでいた。